

【研究資料】

大学バスケットボール指導者の指導哲学と その形成過程

澁澤秀徳¹⁾ 町田 萌²⁾ 濱野光之³⁾

Coaching philosophy and its developmental process of college basketball coaches

Hidenori Shibusawa¹⁾, Moe Machida²⁾ and Koji Hamano³⁾

Abstract

Coaching behaviors have various influences on athletes' performance and psychological growth (e.g., Gilbert & Trudel, 2004; Kitamura et al, 2005). Coaching philosophy is the basic belief that underlines coach behaviors in relationships with athletes (Vealey, 2005). Thus, in addition to gaining technical and tactical knowledge, it is important for coaches to establish coaching philosophy in their practice (Marten, 2012). However, few study have examined coaching philosophy of basketball coaches and its formation processes. Based on Horn's (2008) working model of coaching effectiveness, the purpose of the study was to examine coaching philosophy and its development among college basketball coaches. In-depth, semi-structured interviews were conducted with four college basketball coaches (male: n= 3, female: n= 1; mean age = 52.3 year-old). Inductive analyses (Patton, 2002) were employed while considering association with Horn's working model. The results showed that coaching philosophy of college basketball coaches consists of (1) coaching methods, (2) coaching perspectives, (3) skills and characteristics required for coaches, (4) skills and characteristics required for players, (5) relationship with players, (6) perspectives on team, and (7) tactics and strategies. As the factors that affect the development of their coaching philosophy, (1) role model, (2) experiences, (3) individual factors, and (4) environment factors were identified. The present study provided useful information for coaching education program. Future studies should investigate the relationship between coaching philosophy and actual coaching behaviors, and perceptions of coaching philosophy from athletes and staffs' perspectives.

Key words : coaching mental model, qualitative research, performance enhancement, college sports

キーワード : コーチング・メンタルモデル, 質的研究, 競技力向上, 大学スポーツ

I. 問題提起

公益財団法人日本バスケットボール協会 (JBA) は、

国際競技力向上の取り組みとして、日本代表チームの強化、底辺の拡充と選手の発掘・育成、指導者の育成の3つを掲げている²³⁾。これまで、バスケットボール

1) 東京学芸大学附属国際中等教育学校

Tokyo Gakugei University International Secondary School

2) 大阪体育大学体育学部

Osaka University of Health and Sports Science Department of Sports Education

3) 順天堂大学スポーツ健康科学学部

Juntendo University of Health and Sports Science

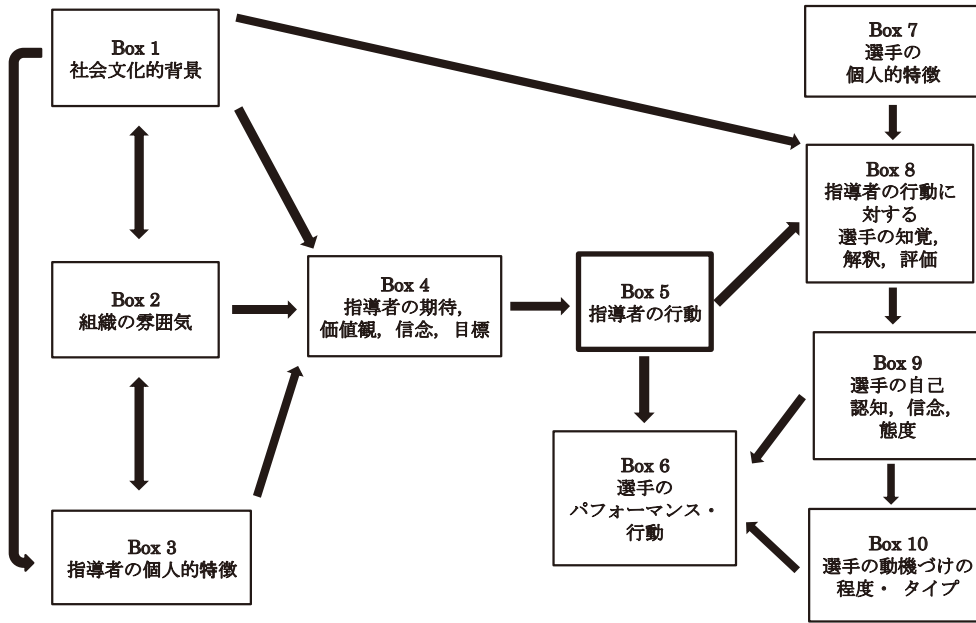


図1 Hornのワーキングモデル (A working model of coaching effectiveness)

の競技力向上を目指したバスケットボールの技術や戦術などの指導方法に関する研究は盛んに行われてきた^{16), 24), 37)}。スポーツ心理学の研究において、指導者の認知や行動は選手のパフォーマンスや情緒面の成長に大きな影響を与える^{1), 13), 14)}と示されているが、国内の研究を概観するとスポーツ心理学的な観点からバスケットボール指導者の認知や行動に着目した研究は、ほとんど見受けられない。

スポーツ指導者の養成に関して、Martensは、戦術や技術に関する知識と同様に、指導者自身の認知や行動の基となる指導哲学を確立することの重要性を述べている²¹⁾。指導哲学は、「指導者が選手との関わりにおいて、指導行動を選択する際の基本的な信念」と定義²⁵⁾される。指導哲学は、困難な決断や逆境に直面した際に、指導者として道徳的観念に基づいた最良の決断を下す際の指針となる²¹⁾。これまで、スポーツ指導者の効果的な指導に関する研究は、心理学的なアプローチを用いて様々な研究が進められてきた。そのなかで、Horn¹³⁾は、指導者と選手の関係性を10の構成要素から成るカテゴリーに分類し、指導者と選手を取り巻く諸要因を体系化したワーキングモデル (A working model of coaching effectiveness) を作成した (図1)。モデルの構成要素は、指導者の行動の先行要因となる社会文化的背景 (Box 1)、組織の雰囲気 (Box 2)、指導者の個人的特徴 (Box 3)、指導者の期待、価値観、信念、目標 (Box 4)、そして、指導者の行動 (Box 5)、指導者の行動が選手に与える影響と選手の特徴 (Box 6 から Box10) の3つのカテゴリーに大別されている。このワーキングモデルは、

近年のスポーツ心理学の研究を加味した上で作成され、練習や試合場面の指導者の行動を中心的な要素とし、指導者と選手の行動や認知、情動を体系化したモデルである。本研究では、このHornのワーキングモデルを基に、指導哲学とその形成過程を明らかにすることを目的とした。

I-1 スポーツ指導者の指導哲学とその形成過程に関する研究

Horn¹³⁾のワーキングモデルに示されている指導者の期待、価値観、信念、目標 (Box 4, 図1) を包括すると考えられる指導哲学は、指導者の行動に大きく起因²¹⁾、それが選手のパフォーマンスや行動を左右することから、国内外でいくつかの研究が行われてきた。Côté et al⁵⁾は、体操競技指導者にインタビュー調査を実施した結果、指導者の知識 (コーチングモデル) は、試合、練習、運営の3つの中心的要素と指導者・選手の個人的な特徴や選手の発達段階などの周辺的な要素で構成されており、指導者は、パフォーマンスの向上のみならず、選手の人間的な成長を最終的な目標としていることが示された。また、Benni & O'Connor²⁾は、インタビュー調査によって、クリケットとラグビーのプロチームの指導者が勝利することに限定しない選手の全面的な成長を重視する指導哲学を持つことを明らかにした。Camiré et al³⁾は、カナダの高校指導者 (バスケットボール、バレーボール、サッカー、レスリング、アイスホッケー) を対象としたインタビュー調査を行い、問題解決能力やチームワーク、礼儀を重んじる精神などのライフスキルの育

表1 研究対象者のプロフィール

	指導者A	指導者B	指導者C	指導者D
性別	男	男	女	男
指導チームの性別	男	男	女	女
年齢(歳)	66	52	44	47
指導歴(年数)	45	14	15	24
プロ選手の輩出(人数)	9	20	3	20
インカレ優勝(回数)	3	4	2	0
インカレベスト8(回数)	6	10	5	6

成を重視する指導哲学を持つことを明らかにした。さらに、Gilbert & Trudel¹⁰⁾ は、ジュニアスポーツの指導者(アイスホッケー、サッカー)を対象に、2年間の多角的な事例研究を行った。その結果、指導者はスポーツ場面の指導のみならず、選手の年齢や競技レベルを考慮し、安全面やスポーツの楽しさを提供することや、チームで勝利することに加えて選手個々の人間的成長を目指した指導など、スポーツ指導者が教育者として幅広い役割を認識していることが示唆された。

一方、前述した内容に類似する研究としては、北村ら¹⁵⁾ が、高校のサッカー指導者を対象にインタビュー調査を行い、質的な分析によってコーチング・メンタルモデル^{註1)}を提示した。高校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルは、選手の個性や多様性を育みながら、基礎的なスキルの習得を目指す「熟達化」、選手の練習に対する自覚と姿勢、思考力・判断力を高める「意識化」、スポーツに専念できるような環境への「支援」の3つの要素から構成されていた。高校サッカー指導者は、プレーパフォーマンスに限定されず、選手の人間形成を考慮した教育的な考えを持っていることが明らかになった。

これまでの指導哲学に関する研究では、指導者は選手のパフォーマンスの向上に加えて、人間的な成長や現役引退後の将来を見据えたライフスキルの習得を目指した考えを持つことが明らかになっている。指導者の育成や成長過程についての研究は海外で多数行われているが^{10), 28), 29)}、そのような指導哲学の形成に影響を与えた出来事や指導哲学の発展・熟達の過程に着目した研究は見受けられない。

I-2 本研究の目的

バスケットボールの競技力向上に必須である指導者養成において、指導者の指導哲学の確立が重要である。本研究では、トップリーグに選手を多数輩出している大学指導者の指導哲学を明らかにすることを目的とした。また、指導哲学のみならず、指導哲学の形成に影響を与えた出来事や指導哲学の発展・熟達の過程を明

らかにし、若年指導者の資質や指導力の向上への提言を行う。

II. 方法

II-1 対象者の選定基準

表1に研究対象者の基本情報を示した。対象者の選定においては、有意抽出法(purposive sampling)に則し、リサーチクエッションに正対する人物である対象者4名を選定した²⁵⁾。先行研究^{3), 11), 12), 15), 36)}を参考に、a) 大学男女バスケットボール部(1部リーグ)の監督もしくはヘッドコーチ、b) 全国大会レベルで継続的にチームを勝利に導いた実績を持つ³⁸⁾(過去10年間で5回以上ベスト8以内に入っている)、c) チームや選手を人間形成の観点からも指導している(日本バスケットボール協会などに所属する複数の指導者から高い評価を得ている者)、d) 現在もチームの指導にあたっている、または、指導現場を引退してから1年未満、e) バスケットボール指導者としての指導歴が10年以上、の5つの項目を設定し、すべての条件を満たす指導者4名にインタビュー調査を実施した。そのうち、2名は男子バスケットボールチームの男性指導者であり、残りの2名は女子バスケットボールチームの男性指導者と女性指導者の1名ずつであった。研究対象者の年齢は、44歳から66歳(平均は52.3±8.4歳)、指導歴は14年から45年(平均は24.5±12.5年)、2014-2015シーズンでプレーしているプロ選手(NBL, bjリーグ, WJBL)の輩出人数は、3名から20名(平均は13.0±7.3名)、全日本大学バスケットボール選手権大会(以下、インカレと表記)での優勝回数は、0回から4回(平均は2.3±1.5回)、過去10年間のインカレベスト8入りの回数は、5回から10回(平均は6.8±1.9回)であった。また、選定条件の信頼性を高めるため、研究対象者の繋がりを通して新たに調査に適した人物を紹介するというスノーボールサンプリング(snowball sampling)²⁷⁾も実施した。

II-2 研究の手続き

本研究では、指導者個人の経験やその現象の本質を記述していくため、現象学的アプローチ (phenomenology approach) を用いて^{6), 7)}、研究協力者の描写に則しインタビュー調査を実施した。質的研究では、研究者自身が研究の重要なツールとなる¹⁸⁾。そのため、Dale⁷⁾の現象学的な研究方法に基づき、インタビュー実施前に研究者の研究トピックに対する関心や経緯、背景などの考えを記述した。これは、研究者自身の固定観念やバイアスをまず明らかにし、研究を進めるためである⁷⁾。これらの固定観念やバイアスによる研究への影響を常に評価をしながら、分析を行った。

インタビューの実施にあたり、理論、先行研究を参考に、質問項目の選定を行った。また、指導経験を有する3名のバスケットボール指導者にパイロットインタビューを実施し、質問項目の精選とフィールド観察やインタビュースキルの向上を図った。

研究対象者への調査依頼については、Eメールと電話によって日時・場所などの日程調整を行った。まず、インタビューは、調査目的を説明した後に、対象者の背景に関する基本的な情報から質問した。次に、レポートの形成 (rapport-building)¹⁷⁾を図るため、「バスケットボールの指導を始めたきっかけについて教えてください」などの質問の後、「これまでのご経験から、選手を指導していく上で、どのようなことが大切だとお考えですか?」、「現在の指導者としての信念や考え方は、どのような過程を経て形成されていったと思いますか?」の2つの基幹的質問 (main question) に従って、インタビューを進めた。本研究では、1対1の半構造化 (semi-structured)、深層的 (in-depth) インタビューを実施した¹⁷⁾。インタビューは、質問項目の内容に則して進めたが、追跡的質問 (follow-up question) や、探索的質問 (probes question) など、必要に応じて柔軟に行った²⁷⁾。また、研究対象者には基幹的な質問項目を事前にEメールで送付し、インタビュー概要の理解を図った。

インタビューは、45分から79分行い (平均時間58.6分±12.8分)、対象者が所属する大学の研究室や会議室で筆者自身が実施した。インタビューの音声をICレコーダーに録音し、インタビュー中は対象者の発話内容とノンバーバルコミュニケーション (表情、視線、身振りなど) を観察しながら、随時フィールドノートに記録した。そして、インタビュー終了直後は、対象者の基本情報やインタビュー内容の要約、簡易的な分析をコンタクトサマリー (contact summary) に記述した。調査は筆頭著者の所属機関の倫理委員会で承認

を得て、2014年8月から11月の3カ月間で実施した。

II-3 データ分析

本研究では、Patton²⁵⁾とCôté et al⁴⁾の質的研究の分析方法を基に、Horn¹³⁾のワーキングモデルとの関連性を考慮しながら、インタビューによって得られたデータを帰納的に分析した²²⁾。まず、ICレコーダーに録音した音声データは、筆者自身でインタビューのテキスト化 (トランスクリプトの作成) を行った。また、データの包括的な理解を図るため、2名の研究者で数回にわたってテキストを熟読し、テキスト化された発話だけでなく、前後の文脈や言葉の背景、ノンバーバルな表現、コンタクトサマリーからの情報も踏まえ、研究者それぞれが指導者の指導哲学とその形成過程について総合的に理解するよう配慮した。

次に、研究対象者それぞれのインタビュー・トランスクリプトから、2名の研究者が個別で、「指導哲学」と「指導哲学の形成過程」の2つに該当すると思われるものを抽出し、意味単位 (meaning unit) の生成を行った³³⁾。意味単位とは、文章・成句を表す1つの概念であり、研究目的を表す最小の単位である。また、同じ概念だと思われる意味単位を統合 (カテゴリー化) し、それぞれのカテゴリー全体を表す概念名を記した。カテゴリーの概念が統合できる場合は、抽象度の高い大カテゴリーとして類型化した (マップの作成)。マップを類似性、相違性、因果関係を考慮しながら議論し、バスケットボール指導者の指導哲学と形成過程のマップを作成した (図2, 図3参照)。

II-4 信頼性の検証

本研究では、1つの現象に対して、信頼性を確立するためにデータと分析者のトライアングレーション (異なる方法を組み合わせて信頼性を確立する)²⁵⁾とメンバーチェック⁶⁾を実施した。データは、インタビューデータのみならず、インタビュー中のフィールドノート、そしてコンタクトサマリーを活用した²⁵⁾。また、分析においては2名の研究者それぞれで個別に意味単位の生成やカテゴリーの作成を実施した後、それぞれの研究者によって行われたデータ分析の内容について、両者の完全な合意が得られるまで議論を行い、意味単位及びカテゴリーの検討・編集を繰り返した²⁵⁾。メンバーチェック (member check) とは、データと暫定的な解釈をデータ提供者へ提示し、その分析結果が妥当で、信頼できるものかどうかを確かめる過程のことである⁶⁾。本研究では、インタビュー・トランスクリプトと、分析から得られたそれぞれの指導哲学と

大学バスケットボール指導者の指導哲学とその形成過程

指導への取り組み	<ul style="list-style-type: none"> { 段階的な指導 (A, B, D) { 理論的な指導 (A, B) { 感情的に追い込む指導 (A) { プレーの徹底 (A, D) { 実力を発揮させる指導 (A, D) { 目標・目的に基づいた指導 (B, C, D) { 自己主張力を高める指導 (C) { 可能性を広げる指導 (A, C, D) 	
指導の観点	<ul style="list-style-type: none"> { 人格の形成 (A, B, C, D) { 帰属意識の醸成 (A) { 環境作り (D) { 結果の重要性 (A, D) { 実践の重要性 (A) { プロセスに焦点をあてる (B, C, D) { 日本バスケットボールの競技力向上 (B) { 世界基準の選手の育成 (D) 	<ul style="list-style-type: none"> { 学業と部活動の両立 (A, B) { 学習志向 (B, D) { ライフスキルの育成 (A, B, C, D)
指導者として必要なスキルと特徴	<ul style="list-style-type: none"> { 指導者のスキル (A, C, D) { 指導者の特徴 (A, D) 	<ul style="list-style-type: none"> { 観察スキル (A) { 説明するスキル (A) { 選手の動機づけ (D) { 工夫するスキル (A, C) { 柔軟性 (B) { 学習志向 (D) { 忍耐性 (D)
選手として必要なスキルと特徴	<ul style="list-style-type: none"> { 選手として必要な身体的スキルと特徴 (A, B, C, D) { 選手として必要な心理的スキルと特徴 (A, B, C, D) { 再現性の高いスキル (A) 	<ul style="list-style-type: none"> { 身体的スキル (A, B, C, D) <ul style="list-style-type: none"> { シュート (A, C, D) { リバウンド (A, B) { ディフェンス (A) { ファンダメンタル (A, D) { コンタクト (A, D) { 身体的特徴 (A, C) <ul style="list-style-type: none"> { ビッグマン (A) { 体力 (C) { 心理的スキル (A, B, C, D) <ul style="list-style-type: none"> { 前向きな思考 (A, B) { 思考 (A, D) { 理解 (A) { 状況判断 (A, B, C) { 自己認知 (C) { メンタルタフネス (A, B, D) { 動機づけ (B) { 心理的特徴 (D) <ul style="list-style-type: none"> { 自尊心 (D)
選手との関わり方	<ul style="list-style-type: none"> { コミュニケーション (A, B, C) { 共同関係 (A, B, C) { コーチとしての意識 (C, D) { 選手と指導者の共通理解 (A) { 選手を一律に扱う (A, C) { 選手の認知の重要性 (D) 	<ul style="list-style-type: none"> { 個々とのコミュニケーション (A, B, C) { 多様なコミュニケーション (A, C) { リーダーとのコミュニケーション (A)
チームの在り方	<ul style="list-style-type: none"> { チームスタッフとの連携 (C) { 1度の失敗は許容する (A) { 共通理解 (A) { 成果のあるルール破り (A) { “個”の自覚と責任 (B) { 凝集性 (A, B) 	<ul style="list-style-type: none"> { 学生スタッフとの連携 (C) { アシスタントコーチとの連携 (C)
戦術・戦略	<ul style="list-style-type: none"> { チームオフENSE (A, C) { チームディフェンス (B) { コンバージョン (A, C, D) { 個人スキル (A, D) { 原理・原則に基づいた戦術 (A, C, D) { 合理的な戦略 (A, D) 	<ul style="list-style-type: none"> { 速攻においてはパスを優先 (A) { オフENSEリバウンド (A) { オフENSEのルールは最小限 (C) { ターンオーバー (C) { トランジション (C, D) { リバウンド (A) { 1対1 (A) { 集団と個のスキルのバランス (D)

図2 指導哲学のマップ^{※2)}

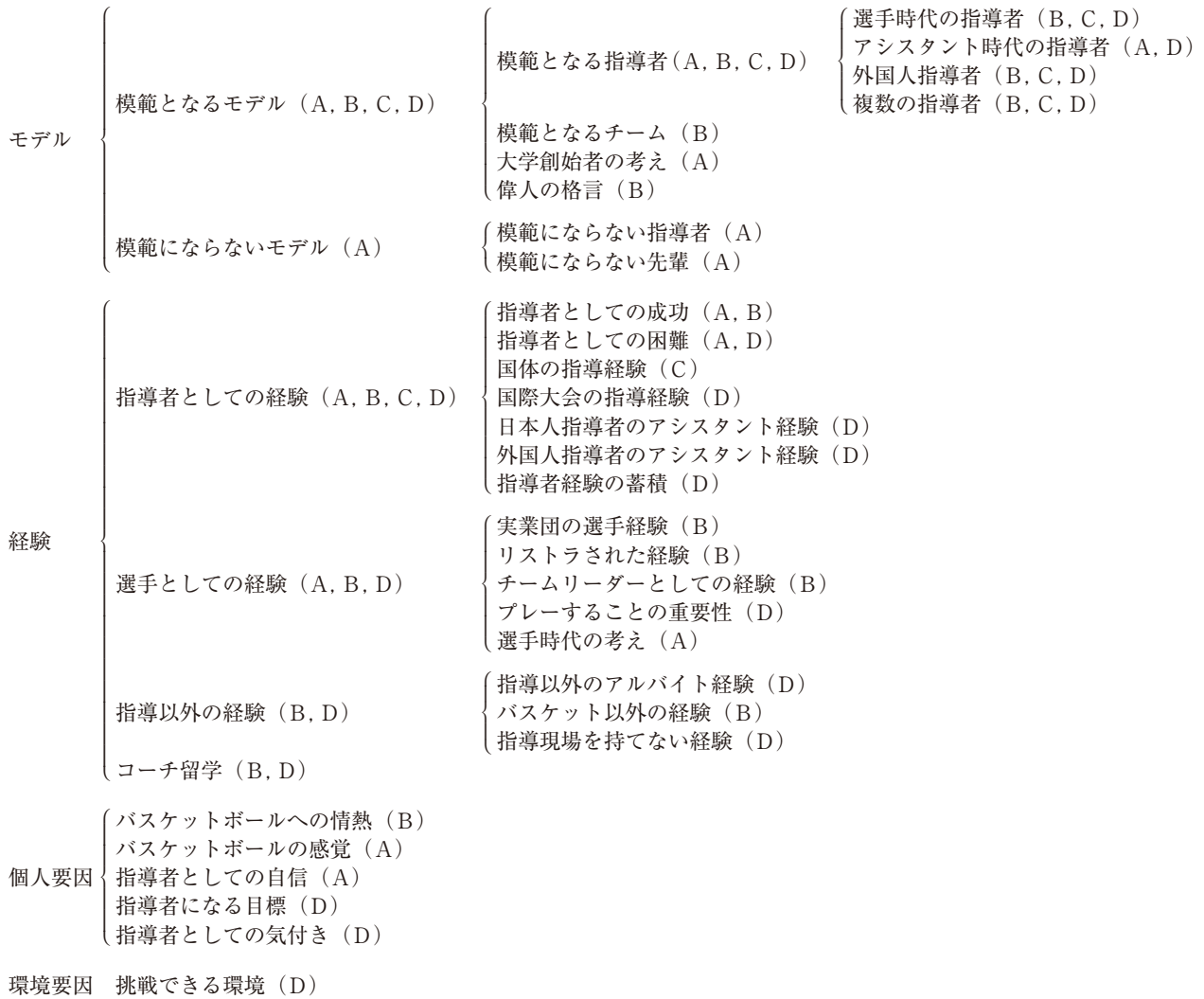


図3 形成過程のマップ^{注2)}

その形成過程についてのマップを4名の研究対象者にEメールで送付し、内容についての意見を求めた。その結果、研究対象者からの反対意見は得られず、分析結果の変更は行われなかった⁶⁾。

Ⅲ. 結果

Ⅲ-1 指導哲学と指導哲学の形成過程モデル

本研究では、96ページのインタビュー・トランスクリプトが作成され、392の意味単位が抽出された。大学バスケットボール指導者の指導哲学とその形成過程について、図式化したモデルを図4に示した。指導哲学の中では、(1)「指導への取り組み」、(2)「指導の観点」、(3)「指導者として必要なスキルと特徴」、(4)「選手として必要なスキルと特徴」、(5)「選手との関わり方」、(6)「チームの在り方」、(7)「戦術・戦略」の7つの大カテゴリーが生成された(図2)^{注2)}。

Ⅲ-2 指導哲学

(1) 指導への取り組み

このカテゴリーでは、「段階的な指導」、「理論的な指導」、「感情的に追い込む指導」、「プレーの徹底」、「実力を発揮させる指導」、「目標・目的に基づいた指導」、「自己主張力を高める指導」、「可能性を広げる指導」、という指導者が選手を指導する中で心がけている指導実践の考え方について示された。例えば、「可能性を広げる指導」について、指導者Cは次のように述べた。

「私なんかすごく思うのは、私の肩幅を超えた選手でいてほしいんですよ。」(指導者C)

指導者Cは、選手との考え方の違いや提案を受け入れる柔軟な姿勢を持つことに加え、「バスケットノート」や“LINE”を活用した選手一人ひとりとの関わりを通じて、選手の表面化されていない資質や特性に

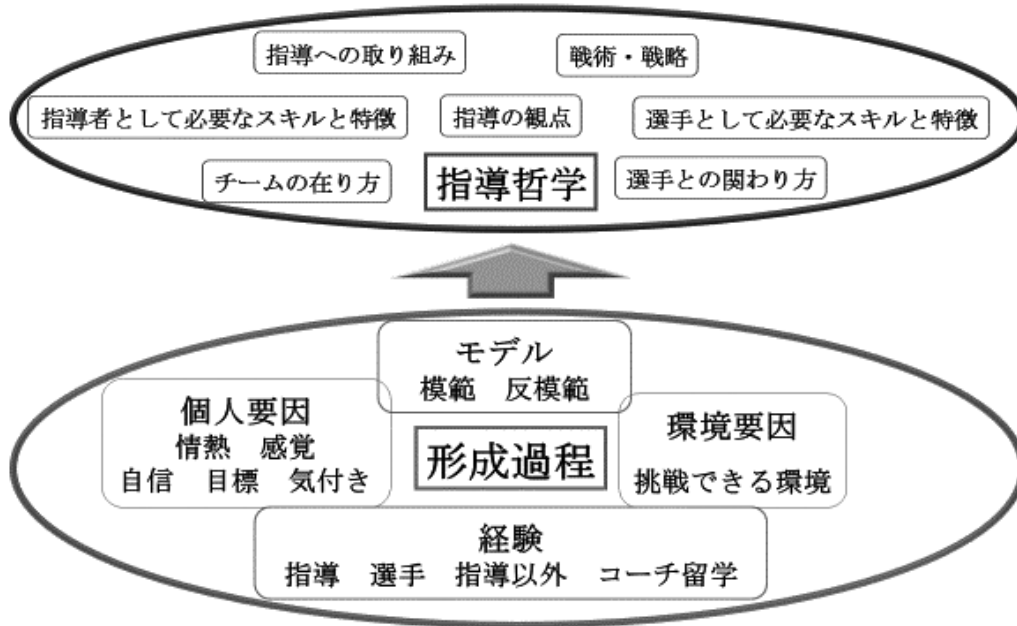


図4 指導哲学と形成過程の関係図

着目し、プレーの幅を広げるだけでなく、選手の可能性を最大限に引き出すような指導を重視する信念を示した。

(2) 指導の観点

このカテゴリーでは、「学業と部活動の両立」、「学習志向」、「ライフスキルの育成」、「帰属意識の醸成」、「環境作り」、「結果の重要性」、「実践の重要性」、「プロセスに焦点をあてる」、「日本バスケットボールの競技力向上」、「世界基準の選手の育成」という、指導者が選手を指導していく中で重要視している点や展望について示された。例えば、「プロセスに焦点をあてる」について、指導者Cは次のように述べた。

「大学くらいになってくると、その努力が全部報われるわけではないので、すごく頑張っても、試合に出れない子はいますから、そういう時はやっぱり、あの一、試合に出る出ないという事じゃなくて、その努力そのものに目を向けてやらないと…」(指導者C)

指導者は、選手の努力の過程に着目する考えを持っていたことが明らかになった。一方、大学トップのチームを指導していることから結果を重視する考えを言及する指導者もいた。しかしながら、指導者は、学生を指導していることから人格の形成、特に、社会に出ていくことを前提に選手の社会人として必要なスキルの育成を重視していることを示した。例えば、指導者Bは「ライフスキルの育成」について次のように

述べた。

「やっぱり1番は選手たちが自主、自立ができて、自分たちで考えて、行動ができるというのが、すごい大事じゃないかなと、そのための、まあ、アプローチであったり、叱責であったり、褒めたりとか、コーチとしての行動、というところをまず、考えなきゃいけないんじゃないかな」(指導者B)

選手の自立を第一に考え、指導者としての言動を選択する姿勢が示された。このように指導者は、選手の人格形成に焦点をあて、大学の指導者としての役割や教育者としての責任を果たすことが重要であることが示された。

(3) 指導者として必要なスキルと特徴

このカテゴリーでは、「観察スキル」、「説明するスキル」、「選手の動機づけ」、「工夫するスキル」、「柔軟性」、「学習志向」、「忍耐性」、という指導者に求められる指導スキルとその特徴について示した。例えば、「学習志向」について、指導者Dは次のように述べた。

「自分自身がもう、もう1回、初心に戻るというか、そういうのは自分で怠らないようにはしてるつもりなんだけどね」(指導者D)

「学習志向」について、指導者Dは、指導の原点に戻ることが重要であることを示した。特に、指導者は、指導経験や指導実績を積み重ねると、選手の可能性を

限定してしまう傾向があることを言及した。そのため、模範となる指導者や実績を有する指導者、競技カテゴリーの異なる指導者などから定期的に教を乞い、指導現場の外に学びの機会を置くことで、指導者としての高い学習姿勢を保っていることが示された。

(4) 選手として必要なスキルと特徴

このカテゴリーでは、「選手として必要な身体的スキルと特徴」、「選手として必要な心理的スキルと特徴」、「再現性の高いスキル」、という指導者が選手に求めるスキルとその特徴について詳述した。その中の、「選手として必要な心理的スキルと特徴」について、指導者Bは次のように述べた。

「ここ（頭を指して）とタフさ。を、身に付けてほしいなって、そうすると、それが人生で本当に役に立つと思うんで、うん、そういうことばかり言っていますよ。特に一番、困難の時、苦しい時に、やってやるってこうね、エネルギーに立ち向かって行くような、人間になってほしいなって思ってます。」（指導者B）

指導者Bは、選手に困難な状況と向き合い、前向きに捉えるようなメンタル面が重要であることを述べた。例えば、運動強度が高い苦しい練習の場面やエースの大怪我によってチームにネガティブな雰囲気が出ている時、指導者Bは選手を集め、その状況を前向きに捉えるための考え方や発想を選手に提示する。特に、苦しい状況に直面している実際の場面で物事を冷静に受け止め、逆境から学ぶ姿勢を重視していた。一方、指導者は「再現性の高いスキル」の重要性を言及しており、練習の成果をゲームで反映させる資質や能力を高めるために、「感情的に追い込む指導」や「理論的な指導」によって、試合場面でのプレーパフォーマンスの発揮を意図した指導方法の工夫が重要である考えを主張した。

(5) 選手との関わり方

このカテゴリーでは、「コミュニケーション」、「共同関係」、「コーチとしての意識」、「選手と指導者の共通理解」、「選手を一律に扱う」、「選手の認知の重要性」、という指導者が選手との関わりにおいて重視している考え方や接し方が示された。例えば、その中の「共同関係」について、指導者Bは次のような考えを持っていた。

「まず、人として、人と人、上下（うえした）もない。人と人として、まあ付き合う。付き合うと

うか、まあお互い尊敬の念、敬意を持つ、ことが大事だと思います。」（指導者B）

指導者Bは、この発話の後に、チームの目指すべき目標を定め、その目標に対してひたむきに邁進すること、また、選手と分け隔てなく意見を交わし合う関係を築くことが勝敗を左右する重要な局面で、実力を発揮できるという考えについて言及した。このような指導者と選手の対等な関係性についての考えが示された。

(6) チームの在り方

このカテゴリーでは、「チームスタッフとの連携」、「1度の失敗は許容する」、「共通理解」、「成果のあるルール破り」、「個」の自覚と責任、「凝集性」という指導者としてチームを指揮していく上で、チームの望ましい方向性に対する考えを詳述した。例えば、指導者Cは、「チームスタッフとの連携」について次のように述べた。

「1人より、2人の知恵の方が絶対良いような気がするのよ。で、それは、アシスタントじゃなくて2人いるんだから、迷った時とか、分かんない時とかに意見を聞く、あるいは、彼女（アシスタントコーチ）らが意見を言って、その中でいいやつを、そのヘッドコーチって、自分の責任で持って裁量で選べばいいんだと…」（指導者C）

大学のチームの実態としてスタッフが学生であることが多いため、学生スタッフとの連携を図ることや、アシスタントコーチと意見を交わし、議論を交えていく中で、最終的な決定権と責任はヘッドコーチが持つというようなスタッフの組織化を図ることの重要性を指摘した。また、指導者は、このようなチームの結束力は、練習の質の程度に影響を及ぼす可能性がある点を指摘しており、選手は指導者の指示や説明に対して、注意を向け、高い集中が共有された雰囲気の中で練習を積み重ねていくことが重要であると示唆した。

(7) 戦術・戦略

このカテゴリーでは、「チームオフェンス」、「チームディフェンス」、「コンバージョン」、「個人スキル」、「原理・原則に基づいた戦術」、「合理的な戦略」、という、バスケットボールの競技特性を総括した考え方やチームの戦術・戦略に対する指導者の価値観について記述した。例えば、「合理的な戦略」について、指導者Dは次のように述べた。

「日本のこういうふう、比較的、あの一、体格的にあんまり、ね、有利でない状況をどういう風に打破していくかっていう、自分のチームも実際そうだったから、大きい子いなくて」(指導者D)

指導者Dは、体格や身体能力などの側面で不利である状況を、意図的な戦略によって有利な状況に転じさせるための戦術・戦略の重要性を示した。

Ⅲ-3 指導哲学の形成過程

指導哲学の「形成過程」の中では(1)「モデル」、(2)「経験」、(3)「個人要因」、(4)「環境要因」の4つの大カテゴリーが生成された(図3)^{註2)}。これらの要因が、指導哲学の形成に影響を与えたことが示された。以下、インタビューの発話内容と照らし合わせながら、各カテゴリーの主要な内容について記述した。

(1) モデル

このカテゴリーでは、「模範となるモデル」、「模範にならないモデル」という指導哲学の形成に影響を与えた人物やチームなどについて詳述した。例えば、指導者Bは、「模範となるモデル」について、次のように述べた。

「高校の指導を受けたH先生は、あの一、ホント温和な方だったんですけど、(部員が)9人しかいなかったんです。で、忙しい方だし、あの一、主任、教務主任もされてたと思うんですけど、でも来た時は(練習に)入ってくれて、5対5をやってくれたり、一緒にやったり、あとはね、その一、自分で教えきれないと思ったら、その我々、いいメンバーも揃ってたんで、合宿に連れてってくれる、だんだん、(レベルの高いチームに)連れてってくれるんですよ、ステップアップして。それも、自分の保険を解約して。だから、そういう愛情というか、人情味、は、H先生に教わった」(指導者B)

指導者Bは、チームや選手との関係性を築くことを重視する共同関係を指導哲学の1つとして挙げた。上述した指導者に教えを受けたことや各競技カテゴリーの、選手との関係性を築く考えを重視する指導者と出会ったことが現在の指導哲学の構築に影響を及ぼしたことが示唆された。その一方で、望ましくない影響を受けた「模範にならないモデル」について、指導者Aは次のように述べた。

「だから、中学とか高校時代につまらない練習をやらされたから…」(指導者A)

指導者Aは、「模範にならないモデル」から、練習に対する根本的な考え方の違いを感じ、そのことが指導哲学の形成に影響を与えた点を言及した。上記の“つまらない練習”とは、試合場面での再現性が低く、状況判断を伴わない練習や“パスはパス”、“ステップはステップ”などの単一的な練習のことを意味する。指導者Aは、「模範にならない指導者から、状況判断を伴う練習や試合に必要とされる複合的な要素を含んだ基礎練習を徹底して指導することが重要であるという考えを再認識するようになった。また、指導者Aのみならず、複数の指導者がアシスタント時代にトップレベルの指導者から細分化された練習や体系的な練習プログラムを見聞する学習機会を持っていた。そして、このようなトップレベルの指導者の影響が指導哲学の形成に影響を与えた点が示唆された。例えば、大学チームのアシスタントコーチをしていた指導者Aは、「アシスタント時代の指導者」について次のように述べた。

「大学の女子のチームを見た時に、指導に加わった時に、まあ今からいうと、そのディフェンスは神業じゃない、ここからこういう風に動いて、こう抑えるぞということが人間業じゃできないんじゃないというところを実際にやるわけよ、練習をね。そうすると、ああやっぱり考え方をきちっと整えて、整理していかないとああいう論理にたどり着かないよね。神業だと思っているプレーを一生懸命考えて指導している人がいるということは、やっぱりそれは(意図的に)そうなるんじゃないのと…」(指導者A)

指導者Aは、アシスタント時代に出会った指導者から、筋道を立てて整理された練習を実践することの重要性や、バスケットボールの原理原則に基づいた指導の必要性を学んだことを示した。

また、指導者はコーチ留学や国際大会など海外のバスケットボールについて見聞する学習機会を持っていた。例えば、指導者Cはアメリカで出逢った「外国人指導者」について次のように述べた。

「1つ目のチームで(アメリカのプロチーム)行った時に、あの時は女性のヘッドコーチと女性のアシスタントともう1人コーチがいて、で、あ

の一、ビデオルームに常に彼女がいて、スナックとかいっぱい置いてあって、でビデオを観ながら、多分、ああでもない、こうでもないってやって、あれはすごい、こう、コーチングとしてすごい理想像だなんて思って…」(指導者C)

指導者Cは、アメリカのトップチームのヘッドコーチやアシスタントコーチらが、議論していた様子を見たことが自身の指導哲学に影響を与えたことを表した。指導者Cは、現在のチームを指導する中で、アシスタントコーチと意見を交わすことや「学生スタッフとの連携」を重視する指導哲学を持っていた。このような指導哲学を持った背景には、上述したトップレベルの「外国人指導者」のようなモデルが存在していたことが明らかになった。

(2) 経験

このカテゴリーでは、「指導者としての経験」、「選手としての経験」、「指導以外の経験」、「コーチ留学」というそれぞれの指導者のあらゆる経験について、指導哲学に影響を与えた経験を示した。例えば、選手を指導していく中での成功経験や困難な経験などを総括した「指導者としての経験」について、指導者Aは次のように述べた。

「大学1年の時に、自分の卒業した(母校の)中学生を夏2か月、7月の20日位から9月くらいまで教えて、で学校へ帰って来て、県大会のこういうのがあるので帰ってきてくださいというので、帰って(中略)まあ一発で県のベスト4までいっちゃったというのが、実は大きなきっかけ。」(指導者A)

指導者Aは、指導者として初期の成功経験によって、バスケットボールの指導に対する自信を高め、論理的に順序立てて、「理論的な指導」を実践するという指導哲学を確立するきっかけになったと述べた。一方、「指導者としての経験」だけでなく、「選手としての経験」が指導哲学の形成に寄与していた点も示された。例えば、「選手としての経験」について、指導者Aと指導者Dは次のように述べた。

「やっぱり自分がプレーをしている時に、こういう風になりたいよねというのが、やっぱりあるんですよ。原点にね。」(指導者A)

「考えながらっていうか、自分がやってみないと

やっぱり、色んなこと分からない」(指導者D)

指導者Aや指導者Dの発話が示すように、選手としてプレーしていた経験は、指導を実践する上での判断材料になることや、指導者は実際にプレーすることで得られる気づきを重視していたことが明らかになった。

また、本研究では、コーチ留学を経験した指導者が、バスケットボールの環境から一時的に離れる期間や経験を経て、「コーチ留学」を決意したことが示された。指導者Bは、「コーチ留学」を決意することになった経緯について、次のように言及した。

「1年半、約2年くらい仕事をやってたんだけど、39(歳)の時かな40(歳)になる時の前に、えー、孔子の教えで(笑みを浮かべる)、40にして惑わずと。で、その時にすごい、バスケはいいのか、バスケはいいのか、心の声があったんで、辞めてアメリカに行きました。だから、課長職を捨てて、その時、やっぱり、バスケのコーチになりたいっていうのがありましたね。だから本当に39(歳)の時かなあ…」(指導者B)

指導者Bは、留学先の外国人指導者の「選手は機械ではなく、人間である(Players are not a machine, player is human)」という教えや体系的な練習、そしてバスケットボールを通して人格形成を促す姿勢に強く影響を受けたことを語った。このような「コーチ留学」を通じた包括的な経験が、現在の指導哲学の形成に寄与したことが明らかになった。

(3) 個人要因

このカテゴリーでは、「バスケットボールへの情熱」、「バスケットボールの感覚」、「指導者としての自信」、「指導者になる目標」、「指導者としての気づき」という指導者自身のバスケットボールに対する感覚や目標などの個人的な影響の要因について記述した。例えば指導者Aは、「バスケットボールの感覚」について次のように述べた。

「だから、動く人間に対して、ここへ投げれば当たるよね、というのが映像としていつも分かりながら投げている。そういうのをちょっと思い出すこともあって、ああやっぱりそこら辺がバスケットの原点になっているのかなあという気がする」(指導者A)

これは、指導者 A が小学生時代に行っていたドッジボールの経験を内省する発言である。このような回顧が、バスケットボールのパス練習や空間把握能力の養成など身体的なスキルの獲得に向けた練習に対する考え方に影響を与えた可能性が指摘された。また、指導者 D は、国際大会の指導経験や選手の成長をきっかけに、これまで設定していた目標を振り返る機会を得た。そのような「指導者としての気付き」について、指導者 D は次のように述べた。

「だから、目標がちょっと、今まで小さ過ぎたんじゃないかあって、ふと考えて、うん、だから、もっと高いことを要求していいんじゃないかな、選手にね。で、そういうところを目指してほしいっていうのが、（一呼吸して）出てき始めて…」(指導者 D)

指導者 D は、現在指導している選手やチームが高いレベルで活躍するようになる過程で、選手に課していた目標が小さかったことに気付き、大学リーグや国内リーグで活躍するだけでなく、世界選手権やユニバーシアードなど「世界基準の選手の育成」を目指す指導哲学を持つようになった。指導者は、国際大会で指導をする機会や経験が指導者としての気付きを促し、指導哲学を見直すきっかけになっていたことを示した。

(4) 環境要因

このカテゴリーでは、「挑戦できる環境」という、指導者を取り巻く環境的な要因による影響について記述した。この点について、指導者 D は次のように述べた。

「僕は恵まれてたというか、大学で（バスケットボールの指導を）やり始めた時にまだ、N（大学）に O 先生がいて、P（大学）に Q 先生、やっぱり大御所がずーっといて、日本をこう、引っ張って行った 2 人がいたので、その人たちに挑戦できた、5、6 年は挑戦できたっていうのがあって、もう、その時ね、（対戦相手の指導者の年齢が）60 越えてて、絶対倒すんだみたいな、こう、目標がもうはっきりしてたっていうか…」(指導者 D)

このように、指導者を取り巻く環境要因が指導者の期待や目標に対する考え方に影響を与えていたことが示された。特に、指導自身の前向きな動機づけに寄与する指導の時機や指導者としてのキャリアに影響を与える人事異動は、指導者の思考を変化させる機会を提供し、そのきっかけによって自身の指導哲学を形成す

るプロセスに繋がることが示された。

IV. 考 察

本研究の目的は、Horn¹³⁾のワーキングモデルに則り、大学バスケットボール指導者の指導哲学とその形成過程について明らかにすることであった。分析の結果、大学バスケットボール指導者の指導哲学は、「指導への取り組み」、「指導の観点」、「指導者として必要なスキルと特徴」、「選手として必要なスキルと特徴」、「選手との関わり方」、「チームの在り方」、「戦術・戦略」の 7 つの要素によって構成されており、形成過程は、「モデル」、「経験」、「個人要因」、「環境要因」の 4 つの要素によって構成されていることが明らかになった。

これまで、国内外において、指導行動の直接的な要因となる指導者の期待、価値観、信念、目標などの指導哲学に関する研究が極めて限定的であった。特に、バスケットボールに関する研究では、戦術面や技術面など指導方法を対象にした研究が多く^{16), 24)}、指導者の行動がどのような意図によって生起されているのかといった指導哲学に関する知見は見受けられなかった。しかしながら、本研究によって、スポーツ指導者の指導哲学の詳細や、指導哲学に影響を与える要因が明らかとなり、バスケットボール指導者の指導に関する知見を得ただけでなく、Horn¹³⁾のワーキングモデルを発展させる知見を得た。

本研究で示された指導哲学の「指導への取り組み」の中では、指導者は「理論的な指導」「感情的に追い込む指導」など指導者固有の指導実践の工夫によって、選手の潜在的な資質や能力を最大限に伸ばす考えを持つことが示された。また、「指導の観点」の中では、指導者は、自主性・自発性を促す支援的な関わりによって選手の動機づけを高めることを重視しており、プレーパフォーマンスのみならず、選手の将来を見据え、「人格の形成」や「ライフスキルの育成」などの教育者としての視点を持っていたことが明らかになった。本研究では、競技レベルの高い大学バスケットボールチームの指導者を対象にしたが、前述した高校チームの指導者¹⁵⁾と同様に、結果のみを重視する成果目標 (performance goal) に限定することなく、選手個々のスキル獲得に向けた熟達目標 (mastery goal)⁸⁾を重視するという「プロセスに焦点をあてる」指導哲学が示された。

「指導者として必要なスキル」の中では、指導者自身が外部に学びの機会を置くことや指導者としての学びを継続するという高い「学習志向」が示された。指

導者は、指導年数を重ねると、これまでの指導経験から選手の可能性を限定してしまうことが少なくない。このような偏見や固定観念を排除するために、指導者は、初心に帰り、他の指導者から継続的に学び続けることが重要である。

「選手として必要なスキルと特徴」の中では、特に、指導者は試合の重要な場面で実力を発揮することや困難な状況を打破するなどのメンタルタフネス¹⁹⁾が、バスケットボールのプレーパフォーマンスに寄与することを言及した。メンタルタフネスは、スポーツ心理学の研究の中でも、選手にとって重要なスキルとされており、ある指導者は、このようなメンタルタフネスが社会生活にも役立つという考えを持っていた。今後は、ライフスキルとメンタルタフネスの関係性や指導者が選手のメンタルタフネスに与える影響を検証するなどの研究が期待される。

「選手との関わり方」の中では、3名の指導者がコミュニケーションを重視する考えを持っていた。具体的には、選手個々と“バスケットノート”を通じた関わりや“選手と指導者の関係に上下(うえした)はない”などの民主的な言動を表す考え方が示された。また、「チームの在り方」の中でも、「チームスタッフとの連携」や「アシスタントコーチとの連携」など、組織を取り巻く人間関係においても、スタッフの意見を尊重するなどの民主的な考えが示唆された。過去の研究では、指導者の民主的な行動は、選手の内的動機づけを高める報告がなされており²⁰⁾、本研究でも、管理的な行動ではなく、選手を中心に据えた民主的な行動を主体とする考え方が重要であることが示された。

さらに、「戦略・戦術」の中では、バスケットボールの「原理・原則に基づいた戦術」や「合理的な戦略」によって、チームの柱となる原則的なプレーの選択や方針を示すことが重要であることが明らかになった。

一方、指導者の指導哲学の形成過程の要素として現れた「モデル」においては、指導者は「模範となるモデル」から正の影響を受けていた反面、「模範にならないモデル」からも影響を受けていたことが明らかになった。Sáiz et al²⁸⁾は、指導者の成長段階には、「模倣」(imitative practice)による学習や気付きを与える助言者(mentors)の役割が重要であることを示唆しており、本研究の結果はこのような過去の報告を支持するものであった。

「経験」の中では、選手時代やアシスタント時代などの指導者固有の成功体験や困難な経験などの解釈、長期にわたる指導実践の蓄積が、指導者の指導哲学の形成に重要である点が示された。特に、4名の指導者

は、「模範となる指導者」からある一定期間、緻密に計画された練習プログラムもしくは、細分化された練習を見聞する経験や学習機会を有していたことを示した。Ericsson⁹⁾は、専門的なスキルを向上させるためには、才能だけでなく、質の高い熟考された練習(deliberate practice)が重要である点を指摘している。また、Sáiz et al²⁸⁾は、指導者の熟達過程には、よりよい指導への探究や指導に献身的に専念する過程が重要である点を指摘している。本研究でも、指導哲学の形成には、経験を通して自身の指導実践を熟達させるプロセスが重要である点が示された。

指導哲学に影響を与えた「個人要因」では、指導者は、国内のみならず、海外のバスケットボールから知見を得ることで、世界基準の選手の育成や日本のバスケットボールの競技力向上などの長期的な目標を持っていたことが明らかとなった。例えば、ある指導者は、国際大会の指導をきっかけに、世界と戦うために必要なスキルの獲得や「合理的な戦略」を考えるようになり、それによって世界に通用する選手を育成することが目標になった点を主張している。その他にもコーチ留学を機に、定期的に海外へと出向き、「外国人指導者」の教えや国際試合の視察など国内から国外に学びの場を広げたことが指導哲学の形成に大きく寄与したことが示された。

そして、「環境要因」の中では、指導者として「挑戦できる環境」が、指導者の学習を喚起する動機づけになっていたことが考えられる。指導者を取り巻く背景や状況は、指導者の期待、価値観、目標を包括する指導哲学^{13), 26), 32)}に影響を与えることから、指導者の学習志向を促進させる「環境要因」が、この指導哲学の形成に正の影響を与える可能性が示唆された。

IV-1 現場への提言

本研究は、若年指導者や指導経験が浅い指導者にとって、有効な情報源となる結果を提示した。特に、選手のスキル獲得に向けたプロセスを重視する考え方、そして、スポーツの経験を通してライフスキルを育成する指導哲学は、さまざまな競技種目や幅広い競技カテゴリーにおいても応用が可能であると考えられる。また、指導哲学の形成には自身の指導経験を内省するプロセスが重要である点に加え、指導者の経験や課題を他の指導者と共有する学習機会が指導哲学の更なる発展に寄与する可能性が示された。スポーツ指導者の養成においては、指導者それぞれの経験や現場での課題を指導者同士で共有し合い、課題解決に向けた議論や意見交換を目的とした学びの場と、指導者の気付き

や自己認知を促す学習機会が重要であると考え、今後は、コーチライセンス制度との協力を図り、組織的且つ継続的に、指導者同士の意見交換や自己認知、指導哲学の形成を促す講習会や研修を展開する必要がある。

IV-2 研究の限界と今後の課題

本研究では、いくつかの課題が残された。第一に、本研究はインタビューデータを基に行われており、大学バスケットボール指導者の指導哲学が実際の指導現場でどのように反映されているのかを観察できなかった点である。インタビューによって、指導者自身の経験への認知を深く理解することが可能であったが、今後はCBAS (Coaching Behavior Assessment System) などの評価システム³⁰⁾を使い、指導哲学がどのように実際の行動に反映されるかについて検証する必要がある³¹⁾。また、本研究の結果を参考に、バスケットボール指導者のサンプルを拡大し、量的な手法も用いて指導哲学を検討する必要があると考える。

第二に、本研究では、指導者の経験を理解することに焦点を絞っていたため、選手やチームスタッフが指導者の指導哲学をどのように認知しているのかということに関しての知見は得られていない。インタビューの中で、指導者は、選手と共同関係を結びながら、個々とのコミュニケーションを図り、学生スタッフやアシスタントコーチと連携することが重要であると示した。今後は、選手やチームスタッフにインタビュー調査を行い、指導者の指導哲学を多角的な観点から検証する必要がある。

第三にHorn¹³⁾がワーキングモデルで示した社会文化的背景や組織の雰囲気などの、指導者を取り巻く環境が指導哲学に与える影響についての検討が必要である。研究対象者4名の雇用形態は、大学教員、コーチ、事務職員と様々であった。特に、大学教員2名の発話の特徴としては、部活動と学業の両立や組織の帰属意識を醸成するなどに主眼が置かれていた点が挙げられた。一方、雇用形態がコーチや事務職員であった2名の指導者は、ライフスキルの育成やチームとして基本的なルール(挨拶や授業への取り組みなど)を遵守するという指導の観念を持っていたが、選手のプレーパフォーマンス向上や試合場面での実力発揮をより重視する傾向が見受けられた。今後は、Horn¹³⁾のワーキングモデルが示す通り、社会文化的背景や組織の雰囲気などの雇用形態や勤務実態、チームや保護者、地域との関係性など、指導者を取り巻く環境に着目し、指導哲学とその外因的な環境の関係性を検証する必要がある。

V. 結 論

バスケットボールにおいて、指導者の存在は競技力向上に不可欠である³⁴⁾。本研究では、Horn¹³⁾のワーキングモデルに則り、大学バスケットボール指導者の指導哲学とその形成過程を明らかにした。その結果、大学バスケットボール指導者の指導哲学は、多様な要素で複雑に関わり合いながら構成されており、また試合場面でのピークパフォーマンス発揮のみならず、選手的人格形成にも焦点をあてていることが示された。さらに、本研究で指導哲学の形成に関わる多様な要因が示され、バスケットボール指導者養成に寄与する知見を得た。

謝辞

論文指導に携わって下さった順天堂大学の先生方をはじめ、インタビューへの参加を快く引き受けて下さった各バスケットボールの指導者の皆様、本稿を執筆する大きなきっかけを作って下さったDream7の西田辰巳さんと第8回アメリカコーチ研修会 Coach Tornadoes に共に参加した皆さんに厚く御礼申し上げます。

〈 注 〉

注1) スポーツの指導行動に関するメンタルモデル(心の中でもイメージであり、それを操作することによって問題を解決するのに使われるもの)を、指導者が選手の指導にあたり心内に構成していく理解内容であると同時にその後の指導の拠りどころとなるもの。

注2) 指導者それぞれの発話結果の個別性及び共通性を明記するため、指導者Aから指導者Dを意味する発話結果の表記を括弧内に示した。

例 指導者AとBが発話した場合は、(A, B)と記載

〈引用・参考文献〉

- 1) Amorose, A. J., Horn, T. S. (2001) Pre- to post-season changes in the Intrinsic motivation of first year college athletes: Relationships with coaching behavior and scholarship status. *Journal of Applied Sport Psychology*. 13, 355-373.
- 2) Bennie, A., O'Connor, D. (2010) Coaching philosophy: Perceptions from professional cricket, rugby league and rugby union players and coaches in Australia. *International Journal of Sports Science & Coaching*. 5, 309-320.
- 3) Camiré, M., Trudel, P. and Forneris, T. (2012) Coaching and transferring life skills: Philosophies and strategies used by model high school coaches. *The Sport Psychologist*. 26, 243-260.

- 4) Côté, J., Salmela, J.H., Baria, A. and Russell, S.J. (1993) Organizing and interpreting unstructured qualitative data. *The Sport Psychologist*. 7, 127-137.
- 5) Côté, J., Salmela, J., Trudel, P., and Baria, A. (1995) The coaching model: A grounded assessment of expert gymnastic coaches' knowledge. *Journal of Sport & Exercise Psychology*. 17, (1) : 1-17.
- 6) Cresswell, J. W., Miller, D.L. (2000) Determining validity in qualitative inquiry. *Theory Into Practice*. 39, 124-130.
- 7) Dale, G. A. (1996) Existential phenomenology: Emphasizing the experience of the athlete in sport psychology research. *The Sport Psychologist*. 10, 307-321.
- 8) Dweck, C. S. (1986) Motivational processes affecting learning. *American Psychologist*. 41, 1040-1048.
- 9) Ericsson, K. A., Krampe, R. T., and Tesch-Romer, C. (1993) The role of deliberate practice in the acquisition of expert performance. *Psychological Review*, 100, (3) : 363-406.
- 10) Gilbert, W. D., Trudel, P. (2004) Role of the coach: How model youth team sport coaches frame their roles. *The Sport Psychologist*. 18, 21-43.
- 11) Gould, D., Carson, S. (2008) Life skills development through sport: Current status and future directions. *International Review of Sport & Exercise Psychology*. 1, 58-78.
- 12) Gould, D., Carson, S. (2010) The relationship between perceived coaching behaviors and developmental benefits of high school sports participation. *The Hellenic Journal of Psychology*. 7, 298-314.
- 13) Horn, T. S. (3rd Ed.) (2008) Coaching effectiveness in the sport domain. *Advances in sport psychology*. 239-267. Champaign, IL: Human Kinetics.
- 14) Isoard, G. S., Guillet, D.E., and Lemyre, P.N. (2012) A prospective study of perceived coaching a style on burnout propensity in high level young athletes: Using a self-determination theory perspective. *Sport Psychologist*. 26, (2) : 198-282.
- 15) 北村勝朗・齋藤茂・永山貴洋 (2005) 優れた指導者はいかにして選手とチームのパフォーマンスを高めるのか? 質的分析によるエキスパート高等学校サッカー指導者のコーチング・メンタルモデルの構築. *スポーツ心理学研究*. 32, (1) : 17-28.
- 16) 幸嶋謙二 (2008) バスケットボール競技におけるバック・カットに関する考察. *バックドア・オフense理論的基盤の検討*. *国際経営論集*. 35, 49-61.
- 17) Kvale, S. (1996) *Interviews: An introduction to qualitative research interviewing*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- 18) Lofland, J. (1971) *Analyzing social settings*. Belmont, CA: Wadsworth Publishing Co.
- 19) Madrigal, L., Hamill, S., and Gill, D. L. (2013) Mind over matter: The development of the mental toughness scale (MTS) . *The Sport Psychologist*. 27, 62-77.
- 20) Mageau, G. A., Vallerand, R. J. (2003) The coach-athlete relationship: A motivational model. *Journal of Sports Sciences*. 21, 883-904.
- 21) Martens, R. (4th Ed.) (2012) *Successful coaching*. Champaign, IL: Human Kinetics, 4-6.
- 22) Moustakas, C. (1994) *Phenomenological research methods*. Thousand Oaks, CA: Sage.
- 23) 日本バスケットボール協会 : <http://www.japanbasketball.jp/jba/conduct/>
- 24) 大高敏弘・吉田健司・内山治樹 (2007) バスケットボールのハーフコートオフenseにおけるディフェンス戦術について. *大学体育研究*. 29, 1-11.
- 25) Patton, M. Q. (3rd Ed.) (2002) *Qualitative evaluation and research methods*. Thousand Oaks, CA: Sage Publications.
- 26) Pelletier, L. G., Séguin-Lévesque, C. and Legault, L. (2002) Pressure from above and pressure from below as determinants of teachers' motivation and teaching behaviors. *Journal of Educational Psychology*. 94, (1) : 186-196.
- 27) Rowan, M., Huston, P. (1997) Qualitative research articles: Information for authors and peer reviewers. *Canadian Medical Association Journal*. 157, 1442-1446.
- 28) Sáiz, S. J., Calvo, A. L., and Godoy, S. J. I. (2009) Development of expertise in spanish elite basketball coaches. *International Journal of Sport Science*. 17, (5) : 19-32.
- 29) Smith, R. E., Smoll, F. L., and Curtis, B. (1979) Coach effectiveness training: A cognitive-behavioral approach to enhancing relationship skills in youth sport coaches. *Journal of Sport & Exercise Psychology*, 1, 59-75.
- 30) Smith, R. E., Smoll, F. L., and Hunt, E. B. (1977) A system for the behavioral assessment of athletic coaches. *Research Quarterly*, 48, (4) : 401-406.
- 31) スモール : 市村操一訳 (2008) *ジュニアスポーツの心理学*. 大修館書店 . <Smoll, F. L., Smith, R. S. (2002) *Children and Youth in Sport: A Biopsychosocial Perspective*>
- 32) Stebbings, J., Taylor, I. M., Spray, C. M., and Ntoumanis, N. (2012) Antecedents of perceived coach interpersonal behaviors: The coaching environment and coach psychological well- and ill-being. *Journal of Sport & Exercise Psychology*. 34, (4) : 481-502.
- 33) Tesch, R. (1990) *Qualitative research analysis type and software tools*. New York: Falmer Press.
- 34) 内山治樹 (2009) 競技力の概念的把握への方法序説. *体育学研究*. 54, 161-181.
- 35) ビーリー : 徳永幹雄訳 (2009) *コーチングに役立つ実力発揮のメンタルトレーニング*. 東京, 大修館書店 <Vealey, R. S. (2005) *Coaching for the Inner Edge*>
- 36) Weiss, M. R., Bolter, N. D., and Kipp, L. E. (2014) Assessing impact of physical activity-based youth development programs: Validation of the life skills transfer survey (LSTS). *Research Quarterly for Exercise and Sport*. 85, 263-278.
- 37) 吉井四郎 (1960) バスケットボール勝敗因の研究 (一). *野投試投数増減に関するプレー*. *一橋大学研究年報*. 人文科学自然科学研究, 2, 223-264
- 38) 全日本大学バスケットボール連盟 : <http://www.jubf.jp/>